

# アメリカ人大学生の談話標識使用傾向 —タフツ大学の学生への調査から—

小林 隆

人間社会環境研究科 博士後期課程1年

## 1. 派遣日程・訪問先

訪問先はアメリカ合衆国、マサチューセッツ州、ボストン郊外にあるタフツ大学である。派遣期間は2012年9月3日から25日の22日間であった。

## 2. 調査概要

### 2.1. 調査目的

談話標識(Discourse Markers)とは挿入句的に使われ、文、命題、発話行為、音韻等の境界を示す言語表現である(Schiffrin (1987: 31))。英語の談話標識には *oh*, *well*, *and*, *but*, *so*, *because*, *I mean*, *you know*, *like* などがあり、主に話し手が会話をスムーズに進行させるために会話のかじ取りをする役割を持つ。その意味変化のプロセスは、それぞれの表現が本来持つ literal な意味が時を経て希薄化し、統語的・意味的变化が生じ、non-literal な意味を持つようになると説明されている(秋本(2010: 19))。例えば *I mean* という表現は、本来“by X, I mean ...”と“I didn’t mean to...”という形にそれぞれ見られるような、動詞 *mean* が本来的に持つ「意味する (to signify)」と「意図する (to intend)」

の二つの意味を反映した用法のみで、統語的には接頭に固定されていたが、文法化により統語的ふるまいが副詞のようになり、接頭だけでなく、節中や節尾に現れるようになった<sup>1</sup>。現在の *I mean* の用法の意味的側面には上述の動詞 *mean* の本来の意味を反映した修正・訂正の用法から、話し手が会話のターンを維持したり、相手からターンを取ったりする機能的な用法までさまざまある(Fox Tree and Shrock (2002))。

私が談話標識を研究対象としたきっかけは、2007年に金沢大学交換留学プログラムでタフツ大学に留学したときに、現地の大学生が *like*, *you know*, *I mean* などの表現を多用しているのに気づいたことにある。本来の意味ではなく、会話で次の言葉がうまく出てこなかったり、自分の次の発話で何を言うのかを示したり、相手に配慮した表現へと言い直したりするときに、それらを明示的に表すサインとしてネイティブスピーカーは談話標識を使用していた。これまでの大学での研究ではBNC<sup>2</sup>やCOCA<sup>3</sup>など会話コーパスのデータを用いて意味的用法を検証してきたが、対話者の関係把握やコンテキストの特定が困難で、定量的なデータを集めることができなかった。今回は、以前の留学先であるタフツ大学で、学生の用いる談話標識の種類と頻度を調査することを目的とした。今回の調査で、調査後に一人の学生が私の調査目的を聞き、「親が若いころは語尾を上昇調のイントネーションにしてスローに言うことが流行っていたみたいだけど、今の学生はみんな *like* とか *you know* を使うよね」とコメントしてくれたが、その言葉が表す通り、言語使用のデータは常に変動し続けるものであり、この機会に数量的な音声・動画データを採集・保存できたことは文化資源学的に大変に意義深いことである。

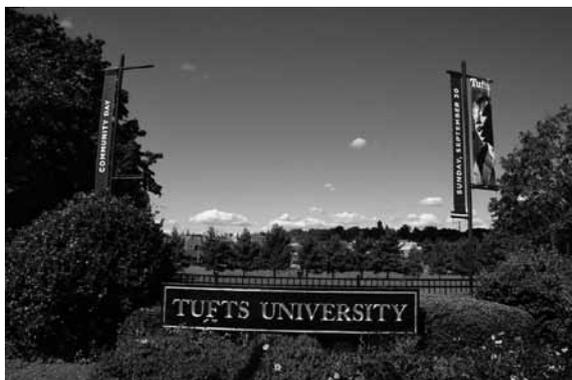


図1 タフツ大学

### 2.2. 調査方法

調査地のタフツ大学はアメリカ北東部の町ボストンにある私立大学で、全米各地から学生が集まって

いる。「ドイツ語・ロシア語・アジア諸言語と文学学科 (Department of German, Russian & Asian Languages/Literature)」に所属する先生の講義を訪れ、講義中に学生にサインアップシートを書いてもらった<sup>4</sup>。時間帯によって協力してくれる学生の数にばらつきがあったため、一度の録音で会話に参加した学生は2人から4人であった。学生には大学生活やクラブ活動など日常的なテーマで15分から30分程度の会話を行ってもらい、それを動画と音声で記録した。協力してくれた学生は18歳から24歳で、ネイティブスピーカーとノンネイティブスピーカーを含め計54名であった。その内訳を以下の表1と2に示す。

表1 調査対象者の年齢

年齢	18	19	20	21	22	24	計
人数	17	12	12	10	2	1	54

表2 ネイティブスピーカーの割合

本人・両親ともにネイティブスピーカー	27 (50%)
本人はネイティブ (生来アメリカ在住) / 両親はノンネイティブ	20 (37%)
本人・両親ともにノンネイティブ	7 (13%)

表2から、本人と両親がともにネイティブスピーカーの割合は全体の50%であるが、アメリカに15年以上住み、教育をアメリカで受け、ネイティブスピーカーとしてカウントすることのできる調査対象者の割合は87%であることが分かる。

採集した音声は計7時間36分32秒で、記録後は、学生の用いた談話標識の種類と頻度を調査した。



図2 会話の様子

### 3. 調査の成果

#### 3.1. 談話標識の種類

研究者によって談話標識の定義は異なり、研究対象として扱う談話標識の種類も様々である。Discourse Markers という用語を定着させた Schiffrin (1987) は *oh*, *and*, *but*, *or*, *so*, *because*, *now*, *then*, *you know*, *I mean* を扱い、Lenk (1998) は *anyway*, *however*, *still*, *incidentally*, *actually*, *what else* を分析対象とし、Jucker and Smith (1998) は *yeah*, *like*, *oh*, *you know*, *well*, *I mean*, *okay*, *really*, *oh yeah* を対象としている。本調査で扱う談話標識は前述の Schiffrin (1987) の定

表3 談話標識の種類

談話標識	総数	全体に占める割合
<i>like</i>	2203	71.69%
<i>you know</i>	210	6.83%
<i>I mean</i>	189	6.15%
<i>so</i>	131	4.26%
<i>but</i>	87	2.83%
<i>well</i>	85	2.77%
<i>actually</i>	46	1.50%
<i>I guess</i>	30	0.98%
<i>I think</i>	27	0.88%
<i>though</i>	22	0.72%
<i>because</i>	17	0.55%
<i>and</i>	10	0.33%
<i>apparently</i>	6	0.20%
<i>oh</i>	4	0.13%
<i>or</i>	4	0.13%
<i>then</i>	2	0.07%
<i>now</i>	0	0%
総計	3073	100%

義に基づいている。計7時間36分32秒の発話の中に見られたのは Schiffrin (1987) の挙げる10種類の談話標識と、本来の意味が希薄化し、統語的ふるまいが変化し、言語的な境界を表すマーカーとなっている *actually, apparently, like, though, well, I guess, I think* であった。

### 3.2. 使用頻度

本調査のデータの中に見られたのは *oh, and, but, or, so, because, now, then, you know, I mean, actually, apparently, like, though, well, I guess, I think* であったが、その使用頻度にはかなりのばらつきが見られた。

#### 3.2.1. *like*

表3が示すように、*like* の使用頻度は圧倒的に多い。発話データの総計が7時間36分32秒あり、平均すると12.4秒に1回使っていることになる。Jucker and Smith (1998) では、カリフォルニア州立大学の学生を対象にした調査で、60秒に3.5回、つまり約17秒に1回、*like* の使用があったとしているが(176)、本調査ではさらにそれを上回る頻度を記録した。本調査では話題を特に指定せず、カジュアルな雰囲気重視したのがその原因として挙げられよう。実際、Jucker and Smith (1998) は会話の参加者同士がよく知る友人か初見かで *like* の頻度に差が出ることを示している。前者が後者よりも1.6倍使用頻度が高かったという(178)。

*like* の本来の意味には以下のような動詞や前置詞としての用法がある。

- (1) 01 A: Ah, that's kinda neat.  
02 B: It's a little bit weird.  
03 A: Did you *like* it a lot?  
04 B: I did *like* it. I mean, it was just, it was a very nice town.
- (2) That was a lot more like, yeah people *like* me, and coming back to Tufts.

(1) の会話はBの故郷についてであり、AがBに「故郷は好きか」と聞いている。(L03)<sup>5</sup>と(L04)の *like* は「好き」という意味を表す動詞として使われている。

(2) では話し手がアメリカの公立学校からインターナショナルスクールに進学したことについて話してお

り、インターナショナルスクールでは自分の「ような」(コケイジャン以外の)学生が多いたことに興奮している。この *like* は前置詞として「~のような」の意味を表す。(1)と(2)の用法に対して、談話標識としての *like* には以下のような用法がある。「=」は発話の連続、( )内の数字はポーズの長さを示す。

- (3) 01 A: It's great and we all get along well and um, we weren't like the best friends, so it's like room for us to grow or to like =  
02 B: =Yeah, yeah.  
03 A: Kind of *like* stay a little apart and it's nice.  
04 B: That is (聞き取り不能)  
05 A: It's really good (0.5) and um, yeah, it's *like* a fourteen minutes' commute on the Orange line.  
06: B: Not bad not bad.

(3) はAが現在住んでいるシェアハウスについての会話である。Aはシェアしている他の3人と、親友と言えるほど仲良くはないが、逆に言えば距離を保っていると言え、それについて満足している様子である。(L01)の *like* は“stay apart”の意味論的意味を弱める働き(mitigation)をしている。Aは今の状況に満足しており、“stay apart”であることをポジティブに捉えているため、その意味が弱ければ弱いほど話し手にとって都合がよいと言える。(L05-06)はそのシェアハウスの場所についての会話で、ボストンの地下鉄の一路線であるオレンジラインで、大学から14分ほどのところにあると言っている。(L05)の *like* は「おおよそ(approximately)」の意味を表す談話標識の用法である。(1)や(2)における動詞や前置詞としての *like* と異なり、談話標識としての *like* は統語的に副詞のような自由なふるまいを見せる。

#### 3.2.2. *you know*

*like* の次に使用頻度が高かったのが *you know* であった。代名詞 *you* と動詞 *know* が持つ意味を強く反映した *you know* の用法が次の例(4)である。[hの連続は呼気(主に笑い)を表す。]

- (4) 01 A: I don't think I need a PhD. (1.0) PhD and art is kind of weird.  
02 B: PhD in English literature is kinda weird but I

wanna do it. hhhh

03 A: Yeah, but that's so like kinda cool, like specific, (1.0) like *you know* something about very specific (0.5) topic. And you can talk about that.

04 B: On history maybe? I don't know it interests you.

(4) の発話は博士号 (“PhD”) についてで、美術を専門としている A には必要ないが (L01)、B が文学で博士号を取ることに A は素敵なことだと言っている (L03)。(L04) の *you know* は特定の話題について「知っている」ことを意味するため、構成要素の本来の意味が強く反映している用法といえる。

談話標識としての *you know* には、以下の例 (5) のように話し手が聞き手との共通理解を確認する用法がある。

(5) 01 A: Yeah, and um, I'm just cross-legislating here at Tufts.

02 B: Okay.

03 A: To take Japanese class =

04 B: Taking Japanese, alright, alright. hhhh

05 A: Yeah, I know.

06 It's a language that I wanted to learn, *you know*?  
=

07 B: = Yeah, why?

08 A: I hope to travel there some day.

09 A: Me, too.

10 B: Yea, either to play music or just to be to experience culture over there, *you know*.

11 A: I don't know anything about the music scene in Japan in terms of jazz trombone players. hhhhh

12 B: Music over there is pretty driving. So, I would be happy to be part of it.

(5) の発話者 A はタフツの正規学生ではなく、ボストン市内のある音楽大学のジャズトロンボーン科に所属し、タフツ大学には単位交換制度を利用して日本語の講義を受けるために来ている (L01-04)。B は (L04) で、ジャズトロンボーン奏者である A がボストンのダウンタウンにある学校からわざわざ郊外のタフツ大学まで日本語を勉強しに来ていることを興味深げに聞いているが (“Taking Japanese, alright, alright.”)、それが

奇妙なことだということは A も分かっており (“Yeah, I know.”(L04))、(L05) でその理由を付け加えている。「勉強してみたい言語」であることを話し手 A は聞き手 B に理解してほしい、つまり日本語を勉強したいという気持ちを共有したいという気持ちから談話標識 *you know* を発し、「分かるでしょ」という意味を伝えている。しかしながら、あまりに個人的なことであるためか、完全なる共通理解は達せられず、聞き手になぜかと聞かれる (L07)。(L10) における *you know* も同様に、話し手 A が「日本に行って音楽活動を行ったり、文化を経験したりしたい」ということを聞き手 B と共有したいと願っているが、聞き手は今回、さらに明示的に「(日本の音楽シーンは)よく分からない (“I don't know”）」と伝えている。談話標識としての *you know* には他に、聞き手に分かってもらうために、何度も繰り返すことで相手に自分の考えを押しつけるような用法が見られた (L04)。

(6) 01 A: Yeah, the fact that he has a whole epic back stories of the story, epic story that he wrote before? like, =

02 B: = Well, yeah, well once you read The Silmarillion, you realize what is the ring is just like (0.5) a part of everything.

03 A: So crazy.

04 B: *You know* like he thought all of this before he thought of The Road of the Rings, *you know* like it's the creation of the world, *you know* like I read things that where he, he explains how he like, propose, proposes it as an alternative to like the creation story, *you know*, that's like, like you can believe this, or you can believe the bible,

また like と同様に、統語的な位置は本来の意味が反映された用法は節頭に限られるが、談話標識としての *you know* は挿入句的なふるまいを見せ、節頭・節中・節尾のどの位置にも平均的に現れる傾向にある (田中・石崎 (1994: 12))。

### 3.2.3. I mean

「2. 調査目的」に *I mean* の構成要素の本来の意味が反映された用法として “by X, I mean ...” と “I didn't mean to...” の二つを挙げたが、現代の会話にはそれら

の意味で *I mean* という表現が使われることはほとんどない (Brinton (2008: 114))。本調査のデータの中にも見られず、*I mean* は談話標識としての用法のみであった。

例えば、聞き手がよく分かっていない、あるいは自分の意図が伝わっていないと察したとき、話し手が *I mean* 以下で説明を付け加える用法がある。

- (7) 01 A: So architecture is totally different, a different discipline? I, right?  
 02 B: It's controversial. um.=  
 03 A: = Controversial? hhh  
 04 B: *I mean*, people like to think that there is art in everything, right? Even in cooking, or collective data.  
 05: Uh-huh.  
 06: There is some sort of beauty inherent. But most fine artists consider architecture is more practical and commercial.

(7) は美術大学に通っている B に A が「建築学の講義は他と違うのだろう」と確認し、B がそれに答えている場面である。(L02) の「建築学が他と違うということについては議論の余地がある」という返答に対して A はよく分かっておらず (L03)、話し手は自分が直前の発話 (L02) で意図していたことを伝えるために *I mean* 以下で説明を付け加えている。つまり、(L05-06) の「建築にも美は内在するが、ほとんどの現代美術作家は建築をより利便的で商業的に捉えている」という発話は、(L02) の議論の余地がある (“controversial”) という発話の意図であるといえる。

談話標識としての *I mean* には話し手が自分の会話のターンを維持する用法と、相手からターンを奪う用法が見られた。以下が前者の例である。( : は音の引き延ばしを表す)。

- (8) 01 A: It's gonna be close-ish but it's going to be Obama. Actually, for as like it's gonna be Romney when (聞き取り不能) Republican nomination.  
 02 B: Okay, anyone who has ever lived in Massachusetts knows for a fact that never be Romney. hhh  
 03 C: To win it?

04 B: Yeah, he's so boring.

05 C: Yeah.

06 A: Well, *I me::an*, while I am not exactly the representative member of, *I mean*, college students. hhhhh

(8) の話題は 2012 年アメリカ合衆国選挙についてで、A は「オバマ候補だと思うが、ロムニー候補になるかもしれない」という立場で、B はマサチューセッツ州に住む人を代表して反ロムニー候補の立場を取っている。(L06) の二つの *I mean* のうち一つは音が延びており、もう一つは節中で挿入句的に使用され、ともに話し手が会話の自分のターンを引き延ばそうとする目的のために挿入する用法である。最初の *I mean* は、目的としてのターンの延長と形式としての音の引き延ばしが類像的 (iconic) に結びついているといえる。

次に示す例は、話し手が相手からターンを奪い取るために使われている *I mean* の用法である。(// は発話の重複を示す。)

- (9) 01 A: The irony of that though, is I don't think GLP would support us as much if you are Latino. hhh  
 02 B: Ah, hhh (0.5) tricky. (聞き取り不能) // touch your ground there.  
 03 C: // *I mean*, at one point, didn't he say that his strate, well I don't know if he said it but, it seems like his strategy was just gonna be try not to do anything, because everything he did just made things, made them look worth, so:: =  
 06 B: = Well, *I mean*, I wouldn't necessarily say that.

(9) の (L03) で話し手 C は B の会話のターン (L02) が完全に終わる前に *I mean* と発話している。その後、(L03) で C の発話が続くことから、*I mean* を用いることで、話し手は B からターンを奪い取っているといえる。*I mean* ではなく、*well* にも同じような用法があるということが (L06) から分かる。話し手 B は C の (L03) の最後の長めの “so” の後すぐに (L06) で *well* と発話し、さきほど取られた会話のターンを奪い返し、B が (L03) で述べたことについて反論を開始しようとしている。

## 4. 今後の展望

今回の調査・分析では終始談話標識の種類と頻度、そしていくつかの例を提示することに留まったが、今後は本調査で記録したデータをもとに以下に挙げる点を重点的に研究していきたいと思っている。

- ・ネイティブスピーカーとノンネイティブスピーカーの談話標識使用傾向の差異
- ・調査対象者の出身地別の談話標識使用傾向
- ・一つの談話標識における用法の整理・頻度の分析と音韻的分析

特に、本文中に例示したように、一つの談話標識に数ある用法があるので、それらをまず整理し、それぞれの用法ごとの頻度を示したい。そしてそれらの用法における音の伸びやイントネーションなどの音韻的特徴の解析も、用法の分析の一つとしては欠かせない。談話標識が他の品詞と異なることを示す重要な証拠となるからである。

### 註

1. 談話標識 *I mean* は節中や節尾にも現れるが、節頭の頻度が圧倒的に多い (田中・石崎 (1994: 15))。
2. British National Corpus (<http://bnc.jkn21.com/>)
3. Corpus of Contemporary American English (<http://corpus.byu.edu/coca/>)
4. サインアップシートは添付資料 1 参照。
5. (L01) の L は談話データの行 (line) を意味している。

### 参考文献

- 秋本実治 (編) (2010) 『Comment Clause の史的研究—その機能と発達—』 英潮社フェニックス, 東京.
- Brinton, Laurel J. (2008) *The Comment Clause in English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fox Tree, Jean E. and Josef C. Schrock. (2002) "Basic Meaning of *You Know* and *I Mean*," *Journal of Pragmatics* 34, 727-747.
- Jucker, Andreas H. and Yael Ziv (eds) (1998) *Discourse Markers: Description and theory*, John Benjamins, Amsterdam.
- Lenk, Uta (1998) *Marking Discourse Coherence: Functions of Discourse Markers in Spoken English*, Gunter Narr Verlag, Tübingen.
- Schiffirin, Deborah (1987) *Discourse Markers*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 田中茂範・石崎俊 (1994) 「日常言語における意味の生成: *You know* と *I mean* の役割」『情報処理学会研究報告自然言語処理 (NL)』1994 (28), 9-16.

添付資料 1

### A Request for Cooperation in Linguistic Research

Hi, my name is Takashi Kobayashi from Kanazawa University in Japan. I am studying English linguistics in Kanazawa's graduate school and am looking for people who can assist me with my research. Specifically, my research is about prosody in English conversation, and I would like to ask you to hold a conversation with another participant in this research while your voice and posture are recorded. Each recording will take approximately 20 minutes. After the recording, as a token of my appreciation, you will receive a small gift from Japan. If you are able to participate in this research, please write your name and e-mail address below.

Thank you,  
Takashi Kobayashi

Date	Time	Name	E-mail Address
9/11 (Tue)	11:00-11:20		
	11:15-11:35		
	14:00-14:20		
	14:15-14:35		
	17:00-17:20		
	17:15-17:35		